

オペラ史へのいざない

星野 宏美

音楽論演習の位置づけ

早いもので、全学共通カリキュラム総合教育科目担当教員（音楽）として立教大学に就任してから11年が経つ。ここ10年の大学の目まぐるしい変革により、所属や担当コマに大小の変化があったが、私の立教大学における帰属意識はあくまで全カリの授業の現場にあり続ける。

現在、全カリ音楽科目は、年間を通して池袋・新座で計12コマ展開されており、そのうち講義4コマ、演習2コマを私が受け持っている。私自身は学生時代を通して少人数による専門教育に慣れ親しんできたので、全カリの大人数講義は、学生一人ひとりの関心に寄り添うことができないという点で、寂しい思いを抱くことは否めない。特に私にとって音楽は決して一般化して語れるものでなく、その時々々の個々の人生を揺さぶり、その体験を他者と共振させるべきものであった。

ゆえに、定員30名の音楽論演習は、履修生の顔と名前と個性が一致するかけがえない機会である。その効用は私に限ったことでなく、学生たちも半期を通して音楽を軸に互いに刺激し合いながら、自らの思惟や感情に意識的に対峙し、それを自らの言葉にすることを学んでいく。学部や学年、知識や関心に応じて、各人がそれぞれに成長する様を目の当たりにするのは、嬉しいものである。

今では昔話かもしれないが、音楽論演習には存亡の危機があった。2006年

の全カリ改革にあたり総合教育科目群の演習は原則廃止され、音楽・美術もその対象とされたのである。前後2年にわたり、立教大学における音楽・美術のあり方について訴え続けた記憶が私には生々しく残る。その甲斐あったか、音楽論演習と美術論演習は継続となった。2008年には当時の総合部会長が音楽論演習の授業参観にいらっしゃり、内容的にも運営上も「全カリ演習にふさわしい真の授業」とお認めいただいたこと、さらに職務とは関係なく突如再訪されてディスカッションに参加してくださったことなどは、忘れがたき思い出である。

オペラ史というテーマ設定に至るまで

音楽に対する知識も関心も、普段の大学生活も人生経験も、全くばらばらな若者数十名を短期間にひとつにまとめることは、生やさしくはない。そもそも、シラバスをきちんと読み、授業のねらいをきちんと理解して履修する学生はごく僅かであり、過半数は内容が音楽であると認識していても、それ以上は深く考えずに履修登録をする。そうした態度を幼稚だ、怠慢だと非難するのは簡単だが、学期はじめに集ってくる学生たちの善良な期待と不安に直に触れると、ここが私の出発点なのだと考えざるを得ない。

私にとっての音楽論演習元年は、博士論文を書き上げ、長い学生生活に終止符をうったばかりの2000年度であった。それまで音大での非常勤講師の経

験はあったが、総合大学で教えるのは初めて。立教大学元年でもあった。テーマには、博士論文の一部でもある「メンデルスゾーンの交響曲カンタータ再考」という、世界的にも最新の研究成果を反映した内容を掲げた。テーマゆえか偶然か、30名定員のところ履修者が3名のみだったので、演習的な性格は保てたのだが、学生の自発的取り組みを想定していた外国語文献の予習や、それを前提とした議論などは到底できず、授業内に私がかみ砕いて解説することとなった。密で充実した時間を過ごせたものの、授業の進行は講義とさほど変わらず、全カリの演習のあり方としてこれではいけないことは自明だった。

そこで、常勤として関わることになった翌2001年度には、よりポピュラーなテーマを設定した（つもりだった）。前期には『音楽の思考術』という入門書を用い、原典版や実用版といった楽譜の違い、古楽運動における楽器の選択など、西洋音楽の旬の話題を皆で論じようと考えたが、なお専門的すぎた。指定教科書の内容を理解できない学生が多い中、高度にマニアックな学生もあり、その落差を埋めるのは難しかった。後期には「バッハへのオマージュ」と題して、バッハから強い影響を受けた後世の作品、時代やジャンルを問わずバッハ作品の編曲や引用などを、個人ないしグループ発表で取り上げたが、学生たちは関心があっても、文献や楽譜や音源を自主的に手繰ることができず、結局は各自の発表準備から内容まで私がお膳立てをすることになった。これでは講義をしたほうが学生にとっても私にとってもよほど効率的だった。

音楽が好きで、多少なりとも関心があれば、誰でも自主的に学ぶことができるテーマ。互いの知識や関心の違いを認識しながらも、その優劣を競うのではなく、互いに補いあえるテーマ。



教員も含めて皆が音楽について自由に平等に活発に議論でき、半期で全員が達成感を共有できるテーマ。全カリの演習らしさを私なりに突き詰めて考えた結果、辿り着いたのがオペラだった。

オペラという総合芸術への 音楽論演習的アプローチ

オペラは1600年前後の北イタリアで生まれ、約400年の歴史を刻んできた総合芸術である。誕生時はイタリア語およびルネサンスの理念と不可分だったが、その後、ヨーロッパの宮廷文化と大衆文化の両方を柔軟に吸収し、18世紀以降は各国のナショナリズムとも結びついて、多彩な発展を遂げてきた。題材も、古代ギリシャ（オルフェオ）やローマ（ジュリオ・チェーザレ）から、北欧伝説（ニーベルンゲンの指輪）やスラヴ神話（ルサルカ）、中近世のヨーロッパ諸国はもちろん、トルコ（後宮からの誘拐）、オリエント（魔笛）、ロシア（イーゴリ公）、エジプト（アイーダ）、新大陸（ボギーとベス）、日本（蝶々夫人）や中国（トゥーランドット）、そして架空の時代と土地へと広範囲にわたる。

指揮者と演出家の統括下、独唱と合唱、オーケストラの大編成により、音楽と言葉と演技と時には踊りが一体となるオペラは、舞台装置や衣装、小道具もあわせ、壮観に尽きる。その醍醐味は、生の上演でこそ味わえるが、その一方で、近年のDVD収録の躍進は目



覚ましい。往年の名盤から最新盤までオペラDVDを追跡、収集することは教材の充実化に繋がるであろうし、また、未来を担う聴衆を育てる上でも益なしではないと考えた。立教大学赴任時に、前任者の皆川達夫先生に「これからのあなたの任務は専門教育ではなく、良い聴衆を育てることです」と言われたことは常に私の脳裏にある。

授業のタイトルを「オペラ」ではなく「オペラ史」としたのは、西洋音楽史を専門とする私のそれなりのこだわりである。時空間を超える素晴らしい芸術作品の数々に対し、評論的アプローチに終わるのではなく、歴史意識をもって向き合うようになってほしいと考えるからである。歴史というと、世界史との関連ばかりに目がいく学生たちも、半期終わりには、音楽様式の変化や、各時代・各社会における芸術の役割の違いにも敏感になっている。教員が講義で理念的に語る以上に、若い時期に作品そのものに多く触れる体験が何よりも重要だとつくづく思う。過去の音楽を繰り返し再生する意味や、芸術表現の可能性と限界など、音楽学的な思索も学生の内から自然に湧きでてくる。

授業の運営

履修生の内訳も関心の高さも授業初日までわからないのが全カリの宿命だから、何があっても転ばない授業計画を立

てている。半期14回の授業のうち、最初の3回を準備に、最終回をまとめに、残りの10回を学生の個人ないしグループ発表にあてている。初回では、オペラ史を概観した上で、発表の基本的方法を私が説明し、学生の反応を見る。この時点で、知識が全くなくついていけないと感じている学生が大半だが、中には音大出身者やオペラ観劇が趣味という通も必ず交じっているの、各人の状況をいち早く把握するよう努める。セミプロや通には発表のトップバッターとしてお手本を示してもらい、半期を通してリーダー的役割を果たしてもらうべく道筋を付ける。オペラに関して全く見当が付かない学生たちにも、悲劇的結末とハッピーエンドのどちらが好きか、女性と男性のいずれが主人公がよいか、ドラマチックな音楽が好きか、それともリリカルな音楽かなど質問し、関心を引き出していくとともに、答えに沿った具体的な作品を紹介して、自発的な取っかかりを与えるようにする。

第2週では、プッチーニの《ジャンニスキッキ》を皆で観る。これを取り上げるのは、普通は3時間程度かかるオペラの中で例外的に短く(50分)、授業内に全体を観られるからだ。第1週に簡単な予習課題を与えておくと、それを怠っても、ぐいと引き込む力をプッチーニのこの名作は持っている。観終わったところでうまく誘導すれば、学生たちは感想や質問を自由に語り始める。そこで各人の関心の特徴を見つけ、それを長所として本人に自覚させるべく試みる。

第3週では、各自に自己紹介をして貰うとともに、発表の担当(日程とグループ分けと対象作品)を決める。学生の気持ちはこの頃にはほぐれており、初対面の相手とでもグループ発表の分担を難なく打ち合わせている。昨今の学生たちの前向きな柔軟性には学ぶところも多い。各作品の特徴を私から担

当者に簡単に伝え、参考文献等も指示して、必要にして十分な指針を与える。

さて、続く学生の発表だが、以上の3回の準備で間に合うわけではなく、原則として事前に30分くらい時間をとって各人と面談している。また、授業前後には教室内で気軽に相談にのるよう心がけている。授業時間以外にも手間暇がかかるが、手間暇をかけただけの効果があるのが演習だろう。

各回の発表担当者は、担当作品を事前に通して観て、授業内で紹介したい見所を50分以内にまとめる。見所の選択基準も本人に考えさせる。視覚的な意味での見所に注目する学生もいれば、筋の上で重要な部分を取り上げる学生、ひとりの登場人物（歌手）に焦点をあてる学生、聴き所（有名なアリアなど）を紹介する学生、オーケストラを傾聴する学生など、実にさまざまである。さらに、事前に必要事項を調査・分析し、鑑賞の手引きとしてレジュメ配布および25分程度の口頭発表をしてもらう。発表の内容としては、作曲家、作品成立の背景、台本と原作、演奏者、収録場所と年代など必須事項もあるが、それ以上に、音楽や題材や舞台の特徴を自ら分析するように面談で促している。個性的な発表内容を紹介する前に紙面は尽きてしまったが、音楽に詳しく、ピアノを弾きながら作曲技法を説明する学生、文学に詳しく、台本と原作の違いを分析する学生、歴史に詳しく、作品の政治的背景を読み解く学生、歌手の仕草や衣装の色遣いなど細部を観察する学生などなど——誰しもが自由に平等に活発に発表し、議論できる場になっていると思う。自己流が強ければ最後に私から補足、修正するが、それ以前に、他の学生から鋭い質問や指摘が投げかけられることも多い。なお、10分程度のディスカッションでは全員が心ゆくまでは語れないので、毎回、コメントペー

パーを提出させている。その内容を翌週に掻い摘んで紹介するのが、他の人の意見がわかっておもしろいと好評である。

学期末レポートを書き上げた上で臨む最終回のまとめでは、担当作品をオペラ史の流れに位置づけるとともに、自分なりのオペラ観を述べるまでにほとんどの学生が達している。考えてみれば、半期の間、毎週オペラ一作を観ることは（生ではなく収録ではあるが）、オペラファンであっても稀有であり、私自身、この授業がなければあり得ない充実感を味わっている。



今後の展望

気がついてみると、音楽論演習のテーマをオペラ史としてから10年が経つ。学生の中には、単位とは関係なく参加するリピーターも複数おり、そのほかにも、卒業前にもう一度この授業に出たいと思ったと顔を出してくれる学生、休講になったからとふらっと立ち寄ってくれる学生などがある。私にとっても毎回が新しい発見であり、充実した時である。

その一方で、このままずっとオペラ史を続けてよいものかと悩んでもいる。オペラ史に匹敵するほど音楽論演習にふさわしいテーマが見つからないのだが、逆に言えば、それだけオペラが魅力的ということだ。毎年変化する学生の気質や流行なども考慮しつつ、もうしばらく続けていこうと思う。

ほしの ひろみ
(本学異文化コミュニケーション学部教授)